

傅增湘の「論北方農事書」について

——藏園文存之二——

稻畑耕一郎

一、はじめに

中國では近代社會に入つて、それまでは絶對的な價値を有した古典文化が古い時代の殘滓として顧みられなくなつたばかりか、公然と攻撃の對象とされた時期があつた。五四運動のころがそのピークの一つであり、それもまつたく理由のないことではなかつた。しかし、傅增湘はそうした時代のなかで數多くの傳世の古典籍善本を収集し、「書潛」という別號をもつて校勘作業に没頭しつつ、膨大な題記を書いて、版本の由來を明らかにし、中國古典學の基礎となる成果を後世に残した學者である。

その古典籍に關わる本筋の仕事は、すでに大半が適孫の傅熹年の手を経て然るべき著書としてまとめられ、私たち

もその恩恵に浴している^①。ところが、折にふれて書かれたいわゆる「詩歌雜著」の類については、選集さえ刊行されておらず、傅增湘の生涯の全仕事や爲人を理解しようとするに甚だ不十分な状況にある。筆者はそのことをいささか遺憾として、この十年ほど、讀書の餘に氣がついた關連の資料を發掘しては折にふれて小文に草して發表してきた。

昨年の本誌第四十期において、「傅增湘稀見序跋二篇探微——藏園文存之二」と題して、若年の時に書かれた「農學纂要」跋」と教育部長であつた時期に書かれた「『農知』序」を取り上げたのも、その作業の一環であつた。その後、前者と密接に關連する、また後者にもいささか關わりのある「論北方農事書」という文章を知り得たので、小稿ではこれを取り上げ、以て前稿の補充とすることとした。

二、「論北方農事書」

傅增湘の「論北方農事書」は、『農學報』の第九期と第十六期に掲載されている。『農學報』については前稿にも觸れたので詳細はそれに譲るが、羅振玉や蔣黼（伯斧²）らが上海で立ち上げた務農會（農學會）を母體として清末の光緒二十三年（一八九七年）五月に創刊された半月刊（一八九八年一月より旬刊）の雑誌である。記事の多くは諸外國の先進的な農業知識や栽培技術などの記事を翻譯して紹介したものであり、その他に關連の「上諭」「奏摺」や論評、會報などを掲載した。

傅增湘の「論北方農事書」は創刊された年の第九期（七月上旬）と第十六期（十一月下旬）の「農會博議」という欄に「傳潤沅」の名で發表された。標題は「傳潤沅論北方農事書」である。『農學報』は決して手に取りやすい資料ではないので、まず書影「圖1—4」と原文を掲げる。次に訓讀に簡略な語注を雜えてひとまずの解釋に替える。また通讀の便を考えて全體に改行を試みた。

【原文】

傅潤沅論北方農事書

湘嘗痛憤吾國通商數十年來，無歲不虧，無業不絀。工藝不盛，妄思閉關，殖利不興，坐待填壑。本之既撥，遑卹其枝。每一溯思，輒爲危慄。

嘗稽之商冊，歷年洋貨日增，土貨出口亦日增，而恆不敵洋貨所增之多。此其咎官吏居其半，而農工亦居其半。且出入相準，每年所絀者，大率以三千萬爲中數。而天津一口，每歲恆絀一千萬，甚至一千三百萬有奇（廿一年數）。是商務之衰，個省居其二，而北省居其一也。天津出口，以煤斤、羊絨、豬鬃、馬尾、羊皮、狗皮、草帽辦等貨爲大宗，而食用釀造製造織紡之品無聞焉。以燕趙天府，土脈深厚，而僅以畜牧壇「擅」場，則地之遺利亦衆矣（畜牧皆塞外之業，則內地固未嘗有土貨也。況又加以土貨進口數百萬，則北人資財每歲耗於洋貨者六，耗於土貨者四，淺羨出口，曾不能收其半，民安得不貧耶）。

故鄙人嘗特此議，以爲欲振出口之貨，宜首重北方。而興北方之利源，尤在力開地利。直隸地廣，而民不稠，然大米仰於蘇浙，雜糧仰於關東，而土產黍麥，外流無幾，是民之不足於食也審矣。說者謂水利未興，故墾闢者

傅增湘の「論北方農事書」について（稻畑）



圖 1 「農學報」第九期（清華大學圖書館藏）



圖 2 「農學報」第九期（同前）

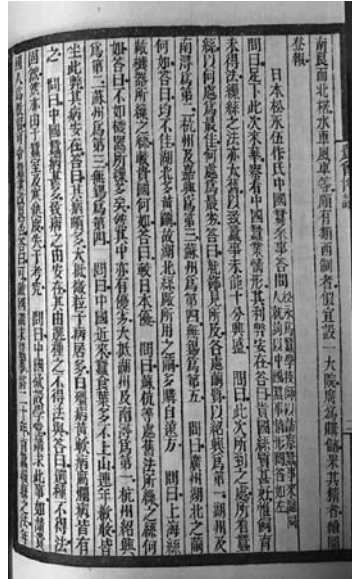


圖 3 「農學報」第十六期（清華大學圖書館藏）

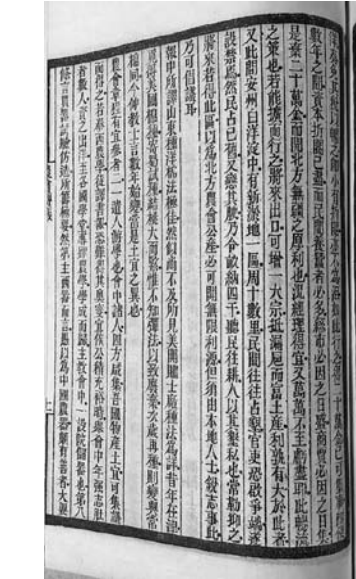


圖 4 「農學報」第十六期（同前）

鮮。愚以爲農民情陋之習使然，非盡水之爲患也。

蠶桑之利，北地有之，易州、正定、深州，皆號產絲之區。深州所產，尤細鞞光潔。前歲家君攜至滬上，絲行品爲佳產，若再加勻淨，便敵湖絲上品。然地處偏隅，銷流未廣，每歲集於大同、新集諸區，祇供京賈之購求，織土機之羅絹，故歷來未嘗增盛。此間官府，頗有振興此舉者，而經畫失宜，利小欲速，惟聞歲發桑秧若干，歲收蠶繭若干而已。

鄙意以爲宜從現在產絲之區著手，設官局以提倡之，合公司以共舉之。責成紳董，廣樹桑柘。博采中西良法，南北土宜，著爲簡說，偏布曉諭。民既久食其利，今又益之，未有不爭赴者，此開源之策也。

由官設行棧，代爲收買，稍增其值以鼓之，轉運出〔下期續印〕。以上、第九期（以下、第十六期）洋，奏免其稅以暢之，即小有折閱，亦不爲沮。如此行之，得二十萬金，已可集事，即使數年之間，資本折閱已盡，而民間養蠶者必多，絲市必因之日盛，商賈必因之日集。是棄二十萬金，而開北方無疆之厚利也。況經理得宜，又萬萬不至虧盡耶。此暢流之策也。若能擴而行之，將來出口，可增一大宗，抵漏卮而富土產，利孰有大於此者。

又此間安州白洋淀中，有新淤地一區，周十數里，民間往往占墾，官吏恐啓爭端，遂設禁焉。然民占已舊，又戀其腴，乃令畝納四千，聽民往耕。人以其墾私也，常勒抑之。將來若得此區，以爲北方農會公產，必可開無限利源。但須本地人士，銳志事此，乃可倡議耳。

報中所譯山東種洋棉花法極佳，然似尚不及所見美開贖土廠種法爲詳。昔年在津，覓得美國棉種，寄蜀試種，結桃大而緊，惟不知彈法，以致廢棄。次歲再種，則變與常棉同。今仲教士言數年始變，當是土宜之異也。

農會章程有宜參者二。一遣人游學也。會中諸人，四方咸集，吾國物產土宜，可集議而得之。若泰西農學，徒譯書報，恐難得其奧窔。宜俟公積充裕時，舉會中年強志壯者數人，資之出洋，至各國學堂，專肄農學，學成而歸，主教會中。

一設院儲器也。第八條言買器試驗仿造，所籌極要，然第主西器而言。愚以爲中國農器，頗有善者。大要南良而北槁。水車風車等，頗有類西制者，似宜設一大院，廣爲購儲，采其精者，繪圖登報。

【訓讀】

傳潤沅、北方の農事を論ずるの書

湘嘗て痛憤す、吾が國の通商數十年來、歳として虧けざる無く、業として細「不足」ならざる無きに、工藝は盛んならずして、妄りに關を閉ざさんと思ひ、殖利「殖殖」は興らず、坐して壑を填むるを待つを。本の既に撥ゆるに、其の枝を遑郵「憂い恐れる」す。一たび溯りて思ふ毎に、輒ち危慄「恐れおののく」を爲す。

嘗て之を商冊「帳簿」に稽うるに、歷年洋貨は日に増し、土貨の出口も亦た日に増すも、恆に洋貨の増す所の多きに敵はず。此れ其の咎は官吏其の半に居りて、農工も亦た其の半に居り。且つ出入相準れば、毎年細なる所の者は、大率三千萬を以て中數「平均値」と爲す。而るに天津一口のみにしても、毎歲恆に一千萬は細たりて、甚しくは一千三百萬有奇（光緒）廿一年の數）に至る。是れ商務の衰へ、個の省「直隸」は其の二に居りて、北省「北方の省」は其の一に居るなり。天津の出口は、煤斤・羊絨・豬鬃「豚の頸部や背に生える剛毛」・馬尾・羊皮・狗皮・草帽辮等の貨を以て大宗と爲して、食用・釀造・製造・織紡の品は焉を聞く無し。燕趙は天府にし

て、土脈は深厚なるを以てするも、僅かに畜牧を以て擅場「ひとりじめ」とするは、則ち地の利を遺うこと亦た衆し（畜牧は皆な塞外の業なれば、則ち内地は固より未だ嘗て土貨有らず。況んや又た加うるに土貨の進口數百萬を以てすれば、則ち北人の資財の毎歲洋貨に耗なわる者は六、土貨に耗なわる者は四、淺淺たる出口は、曾て其の半ばを收むる能はずして、民は安ぞ貧ならざるを得んや）。

故に鄙人嘗て特に此を議し、以爲く、出口の貨を振はんと欲れば、宜しく首に北方を重んずべし、と。而して北方の利源を興すは、尤も力めて地の利を開くに在り。直隸は地廣きも、民は稠からず、然るに大米は蘇浙に仰ぎ、雜糧は關東に仰ぎて、土産の黍麥は、外に流れて幾も無し、是れ民の食に足らざるや審かなり。説く者謂うに、水利未だ興らず、故に墾闢する者鮮し、と。愚以爲く、農民の情陋の習の然らしむるにして、盡くは水の患と爲すに非ざるなり。

蠶桑の利、北地も之有り、易州「保定」、正定「石家莊」、深州「衡水」、皆な絲を産するの區と號す。深州の産する所、尤も細軟にして光潔なり。前歲、家君攜えて滬上の絲行に至る。品は佳産爲りて、若し再び勻淨「精

粗を整える」を加ふれば、便ち湖絲の上品に敵す。然れども地は偏隅に處り、銷流「販賣流通」未だ廣からず、每歲大同・新集の諸區に集い、祇だ京賈の購求に供し、土機「舊來の機織り機」の羅絹を織るのみにして、故に歴來未だ嘗て増盛ならず。此の間、官府頗る此の擧を振興する者有るも、經畫「經營計畫」は宜を失い、利小なるも速やかならんと欲し、惟だ歲に桑秧「桑の苗」若干發き、歲に蠶繭を若干收むのみと聞く。

鄙意に以爲く、宜しく現在の産絲の區従り著手し、官局を設け以て之を提倡し、公司を合して以て共に之を擧ぐべし。責は紳董「地元の有力者」と成して、廣く桑柘「くわ」を樹多しむ。博く中西の良法、南北の土宜を采り、著して簡説を爲し、偏く布して曉諭せん。民は既に久しく其の利を食らい、今又た之に益すれば、未だ争いて赴く者あらず。此れ開源の策なり。

官に由り行棧「出店」を設け、代りて收買「購入」を爲し、稍や其の値を増し以て之を鼓し、轉運して洋に出だし、其の税を免ぜんことを奏し以て之を暢すれば、即ち小や折閱「減価」有るも、亦た沮「障碍」とは爲らず。此の如くして之を行へば、二十萬金を得、已にして

集事「成功」す可し。即使ひ數年の間に、資本折閱して已に盡くるも、民間に養蠶する者必ず多く、絲市は必ず之に因りて日に盛んに、商賈は必ず之に因りて日に集う。是れ二十萬金を棄てて、北方の無疆の厚利を開くなり。況んや經理の宜しきを得れば、又た萬萬虧盡「缺損」するに至らざらんや。此れ暢流の策なり。若し能く擴げて之を行へば、將來の出口、一大宗を増すも可ならん、漏卮「利權が外に漏れる」に抵りても土産に富めば、利は孰れか此より大なる者有らん。

又た此の間、安州「保定安新」白洋淀の中、新たなる淤地一區有り、周十數里、民間往往にして占墾するに、官吏は争端を啓くを恐れ、遂に禁を設く。然れども民の占すること已に舊く、又た其の腴を戀うれば、乃ち畝に四千を納めしめ、民の往きて耕やすを聽す。人の其の墾を以て私するや、常に之を勒抑せん。將來若し此の區を得て、以て北方農會の公産と爲さば、必ずや無限の利源を開く可し。但だ本地の人士の、銳志もて此を事とするを須ちて、乃ち倡議す可きのみ。

『報』中に譯する所の山東の洋棉花を種うるの法は極めて佳なり、然れども尚ほ見し所の美の開墾土廠「不明、

企業名か」の種法の詳らか爲るに及ばざるに似たり。昔年、津に在り、美國の棉種を覓むるを得て、蜀に寄せて試みに種うるに、結は桃大にして緊なるも、惟だ彈法を知らずして、以て廢棄するを致す。次歳再び種うれば、則ち變じて常棉と同じ。今仲教士言ふ、數年にして始めて變ずるは、當に是れ土宜の異なるべきなり、と。

農會の「章程」に宜しく參ずべき者二有り。一は人を遣りて游學せしむことなり。會中の諸人、四方より咸な集まる。吾が國の物産・土宜、集議して之を得可し。若し泰西の農學、徒らに書報を譯するは、恐く其の奧交を得るは難からん。宜しく公積「會の積立金」の充裕の時を俟ち、會中の年強志壯なる者數人を擧げ、之を資け洋に出だし、各國の學堂に至り、専ら農學を肄い、學成りて歸らば、會中に主教せしめん。

一は院を設け器を儲ふなり。第八條に言ふ、器を買い試験して仿ひ造る、と。籌する所は極めて要なり、然れども第だ西器を主として言ふのみ。愚以爲く中國の農器、頗る善き者有り。大要は南は良きも北は拙し。水車・風車等、頗る西制に類する者有り。宜しく一大院を設け、廣く購儲を爲し、其の精なる者を採り、圖を繪き

報に登すべきに似たり。

三、「論北方農事書」についての若干の考察

傅增湘は同治十一年（一八七二年）の生まれであるので、この提言を發表した光緒二十三年（一八九七年）は二十六歳である。傅增湘の公開された文章としては最も早い時期に屬するものである。當時、傅增湘はすでに舉人ではあつたが、まだ進士には及第しておらず、桐城派の吳汝綸（學甫）が主宰し、多くの人材を輩出した保定の蓮池書院で學んだあと、吳汝綸の推薦を得て、保定の南の清苑縣の縣令であつた勞乃宣（玉初）の幕下に入り、その幕僚を務めていた。傅增湘の「藏園居士六十自述」には「之を久しくして、先生（吳汝綸）余を薦めて勞公玉初の幕に入らしむ。勞公は純儒を以て吏と爲り、相ひ依ること六年、啓迪に資すること多し」と記す。

傅增湘は、この時、縣令勞玉初の幕僚として具體的にどのような仕事をしていたのか。後年、この時期の仕事を回顧して、傅增湘は『時務報』を創刊した汪康年（穰卿）の弟の汪詒年（頌毅）に寄せた書翰に次のようにいう。

頌毅先生年大人左右：

月前、手書、並びに賢昆穰卿同年の『遺著』及び『傳記』二冊を奉じ披誦すること一過、感佩既つきること無し。憶ふに光緒丙申『時務報』創刊の時、弟適たまたま勞玉初の幕中に居り、勞公時に保定の清苑縣の令たり。弟此の報を讀むを獲て、欣慰特に甚し。因りて勞公と語り、首縣（縣政府の所在地）の力を以て、函を全省の各州縣に馳せ、此の報を訂閱せんことを勧め、推銷して六、七百分に至る。因りて穰公と函を通じ、深く景慕を致す。此れ訂交の始めなり。戊戌以後に至り、道して上海に出で、乃ち把晤するを得たり。……五月廿二日。⁽⁹⁾

この書翰は、宣統三年（一九一一年）に亡くなった汪康年の『汪穰卿遺著』八卷と『汪穰卿先生傳記』五卷が刊行され、それを弟の汪詒年が贈られた返禮として書かれており、末尾の「五月廿二日」は兩書が自印刊行された一九二〇年（民國九年）のことと考えられる。『時務報』の創刊時（光緒二十二年「一八九六」七月）からは二十餘年を経てゐる。文中では、かつて『時務報』創刊とともに手に取つて讀んだ時の感激とそれを全省に定期購讀させたことなど

を思い起こして語っているが、これによつて、端無くも勞乃宣の幕下にあつた時の仕事の一端が窺える。

汪康年は『時務報』を創刊（光緒二十二年七月）したことでその名を知られるが、その後にも『中外日報』『京報』など、生涯を通して多くの雑誌の創刊に關わつた出版人であり、務農會（農學會）の『農學報』の創刊（光緒二十三年五月）にも深く關與した人物であつた。羅振玉、蔣黼らが務農會を提唱した時、まず援助を求めたのが、すでに『時務報』を始めていた汪康年であつた。⁽¹⁰⁾ 汪康年には期刊雜誌を出版し運営していく經驗があり、販賣方法も熟知していた。實際に『時務報』と『農學報』を見比べると、石印の版面も編集の方法も極めてよく似通つてゐることがわかる。

この書翰の文面によれば、その當時、傳增湘は汪康年とは面識はなく、書翰を通しての交流ではあつたが、ここに言及される『時務報』だけではなく、當然『農學報』創刊のことも熟知してゐたはずである。『時務報』は光緒二十二年（一八九六年）十一月一日の第十三冊に、『農學報』の刊行母體となる務農會の設立と寄付金を募る「公啓」を掲載している。そのことを取り計らつたのは汪康年であ

①『時務報』の創刊を喜んだ傅増湘が『農學報』知らな
いはずはなかった。従つて、傅増湘が創刊されて間もない
時期にこれに文章を寄稿したのもむしろ當然のことであ
つたさえと思われる。あるいは、汪康年から書面を通し
て執筆を求められたのかもしれない。

傅増湘のこの文は中國北方の農業をいかにして振興させ
るかを論じたもので、まず外國産品の輸入による農業不振
の現状を述べ、次いで土地の開拓と官民協力しての養蠶業
の推進や綿花の増産などの「開源の策」と「暢流の策」を
提言する。そして、末尾には外國の農業技術の移入には單
に外國の農業知識を翻譯して知らせるだけでなく、有爲な
若者を外國に留學させて實地に學ばせること、更にはしか
るべき場所を設けて農具を集積し、その改良を圖ることな
どを提言している。

ここで述べられている内容は、前稿で取り上げた陳恢吾
の『農學纂要』に寄せた「敍」の内容と一脈相通するもの
がある。しかし、それに先立つこと四年、若干若書きの氣
配があり、提言もまだ未熟なところが見受けられる。また
末尾などは未完のままに終わっているようにさえ感じられ
る。この間に傅増湘は光緒二十四年戊戌（一八九八年）の

殿試で進士に及第して翰林院編修となつており、またその
後に汪康年とも「道して上海に出で、乃ち把晤する」機會
を得て、^②社會の状況に對する理解もより深まつたやうで、
『農學纂要』の「敍」では自信と責任を持つて農業の振興
を主張できるようになつてゐる。兩者を讀み較べると、舉
人と進士とではこれほども見える世界が違うのかという讀
後感もある。

若き日の傅増湘は、なぜこころした社會問題に關心を持つ
ていたのか。後年、現實の社會の動きとは距離をおいて、
ひたすら古典籍の世界に沈潜し、あるいは遊山すること
心を癒やすかのように見える傅増湘の姿だけを以て傅増湘
を認識する人からすると、ある種の驚きがあるかもしれない。
しかし、當時は國の棟梁たらんとし、科擧の及第を目
指していた若者であり、國家の行く末にも強い關心を持つ
ていたことはむしろ自然なことであつた。

そもそも傅増湘が學んだ蓮池書院「圖5」での呉汝綸の
教育は、傅増湘の言葉をもつてすると、「致用を以て主と
す」るものであり、とくに「國家離亂の機」「中外の政教
の要」「窮變通久の宜」の三者を重視するものであつたと
いうので、かなり實用的な學問を志向していたことがわか

圖5 保定蓮池書院の大門の扁額（筆者撮影）



る。「會^{たま}たま外患方に亟^{すみや}かにして、國是紛紜たり。先生の勤勤として詔誨する所以は、世故に通知し、時に乗じて自ら效^{いた}さしめんことを欲し、徒らに文士を以て相ひ期するに匪^いざるなり」であつたともいう。

蓮池書院の當時のこうした學風の中で學び、その優等生であつた傅增湘が「國家離亂の機」にあたつて、いかにしてこれを建てなおすべきかを考えたのも當然のことで、その方途が外國との通商の不均衡を農業改革を通して是正せんとすることにあつた。

この文章を掲載した『農學報』とそれを出版した上海農學會（務農會）には、先に言及した羅振玉（一八六六年生）、蔣輔（一八六六年生）らのほか、梁啓超（一八七三年生）、譚嗣同（一八六五年生）なども當初の會員として名を連ねている。¹³ 主要メンバーの多くは二十代後半から三十代であり、彼らは、その後、決して同じ道を歩んだのではないが、清末のこの時期、若者の多くが農業の振興を謀ることで社會を何とかして建てなおさねばならないと考えていたことは確かである。そうした一群の人びとの中に若き日の傅增湘もいたということがわかる。この『農學報』の文章は、そうした意味で傅增湘の生涯を考える上でも看過し得

ないものである。ここに取り上げて、小文を草した所以である。

注

(1) 傅增湘の古典籍関連の主著としては、『藏園群書題記』『藏園群書經眼錄』『張元濟傅增湘論書尺牘』『藏園訂補邵亭知見傳本書目』『藏園羣書校勘跋識錄』などがある。この他にも、名山古蹟を訪ねた游记を集めた『藏園游记』や晩年になって往時の詩の一部を自書した『藏園老人遺墨』などがある。いずれも生前に發表されたものに基づき、傅熹年の整理を経て刊行されている。『校勘跋識錄』は、王函整理。

(2) 蔣黼、字は伯斧、名は一に黻に作る。蘇州吳縣の人。羅振玉とともに農學會を始めただけでなく、日本との關連も深く、上海で開設した日本語教育機關の東文學社からは王國維・樊炳清・沈紘らの學者・編集者・翻譯家が育った。自身も光緒二十九年（一九〇三年、明治三十六年）、大阪で開かれた第五回内國勸業博覽會の視察を兼ねて來日し、二か月ほど日本各地を見て歩き、實業や教育制度など、様々な面での當時の日本の先進性に目を見張り、それを『浮海日記』に克明に記している。日本では、嘉納治五郎、竹添井井、内藤湖南などと面談し、とくに當時大阪朝日新聞の主筆であった湖南とはその後にも交流を重ねている。内藤湖南に「次蔣伯斧韻」の七言絶句がある（『内藤湖南全集』卷十四所收）。注（10）所引論文、並びに王德毅『王國維年譜』（中國學術著作獎勵委員會、一九六七年六月、臺北、

王亮「中日文化的交光互影——蔣黼日記與日本大阪内國博覽會」『中國教育報』二〇一〇年八月十五日、中國教育報刊社）参照。
 (3) 「潤沅」の號は、後年、あまり見ることがない。この文の冒頭には「湘嘗痛憤」云々と始まっているので、「論北方農事書」の標題に編集部が著者名として「傅潤沅」の號を冠したのではないかと思われる。

(4) 仲均安は、英語名 Rev. A. G. Jones、英國バプティスト教會の宣教師。清末に山東の濟南、青州などの地で布教活動に務めた。著書に『字學新法』（上海廣學會校刊、上海商務印書館代印、一九〇三年）『祀生探原』（上海廣學會、一九〇三年）、譯書に『山東貧窶考』（同前）などがある。王樹槐「外人與戊戌變法」〔中央研究院近代史研究專刊〕一二、一九八〇年、王淼「傳教師與地方經濟——仲均安在山東活動述論（一八七六一一九〇五）」〔韓山師範學院學報〕第三十一卷第二期、二〇一〇年四月）など参照。

(5) 傅增湘が順天鄉試に参加して合格したのは、光緒十四年（一八八八年、戊子）。傅增湘「藏園居士六十自述」（自印）。

(6) 勞玉初（一八四三年—一九二二年）は、名は乃宣、玉初は號。浙江桐鄉の人。同治十年（一八七一年）の進士。提學使や各地の知縣を経た後、京師大學堂總監督、學部副大臣などを歴任した。義和團の鎮壓に當たるなど終生清朝を尊崇し、專制君主制を主張して張勳復辟にも加擔した。著に『桐鄉勞先生遺稿』があり、そこに自編の『朝叟自訂年譜（朝倉老人自訂年譜）』が附されている。近年の研究に張立勝「縣令、幕僚、學者、遺

老——多維視角下的勞乃宣研究』（人民出版社，二〇一二年八月）がある。また、張立勝「九〇年來的勞乃宣研究」（《金陵法律評論》二〇一一年秋期卷、南京師範大學法學院）参照。

(7) 汪康年（一八六〇—一九一）字は穰卿。浙江錢塘の人。光緒二十年（一八九四）の進士。梁啓超・黃遵憲らと『時務報』の創刊に關わり、經營を擔當したが、のち意見の對立から一人で實質的な責任者として編集出版を取り仕切ることになる。また一八九七年には『農學報』の創刊に參劃し、翌年には上海に日本語學校東文學社を設立。この間に古城貞吉、藤田豊八らと親交を結ぶ。その後、時の政權からの干渉があることに、『昌言報』『中外日報』を創刊するなど、生涯新聞雜誌の發行人として活躍した。その間の數多くの書簡は『汪康年師友書札』（上海古籍出版社，一九八六年二月）として整理されている。

(8) 傳增湘「藏園居士六十自述」（自印）に「久之、先生薦余入勞公玉初幕。勞公以純儒爲吏，相依六年，多資啓迪」とある。

(9) 「頌毅先生年大人左右…月前奉手書，并賢昆穰卿同年遺著及傳記二冊，披誦一過，感佩無既。憶光緒丙申《時務報》創刊時，弟適居勞玉初幕中，勞公時保定清苑縣令。弟獲讀此報，欣慰特甚，因與勞公，以首縣之力，馳函全省各州縣，勸訂閱此報，推銷至六、七百分，因與穰公通函，深致景慕，此訂交

之始也。至戊戌以後，道出上海，乃得把晤。…五月廿二日」（『汪康年師友書札』、上海古籍出版社，一九八六年二月）。

(10) 『時務報』と『農學報』との關係については、李尹蒂「務農會與《時務報》館」（『江蘇社會科學』二〇一四年第三期、江蘇省哲學社會科學界聯合會）、また章楷「務農會、《農學報》、《農學叢書》及羅振玉」（『中國農史』一九八五年第一期、中國農業科學院・南京農業大學中國農業遺產研究室、錢鷗「羅振玉・王國維と明治日本學會との出会い」『農學報』・東文學社時代をめぐって」（『中國文學報』第五十五集、京都大學中國文學會、一九九七年）、衣保中・郭欣旺「藤田豊八與清末中國西方農學引進」（『東北亞論壇』二〇〇四年第三期、吉林大學）、李慶「王國維的一封信——兼談王國維和藤田豊八關係中的幾個問題」（『中國典籍與文化』二〇一〇年第四期、全國高桐院校古籍整理研究工作委員會）など参照。

(11) 『時務報』第十三冊（光緒二十二年十一月一日）の「務農會公啓」は、「上虞羅振玉、會稽徐樹蘭、如皋朱祖榮、吳縣蔣黼」の四人の連名で出されている。その末尾に、汪康年は務農會の創設について述べ、「斯實今日切要之舉，特將公啓附印報末，以俟同志。康年謹誌」と推薦の辭を記す。

(12) この間の經緯については、拙稿「傳增湘の稀見序文二篇探微——藏園文存之一」（『中國文學研究』第四十期、早稻田大學中國文學會，二〇一四年十二月）参照。

(13) 傳增湘「藏園居士六十自述」（自印）に「辛卯隨侍居保定時，吳摯甫先生主講蓮池書院，從游者多一時集。余進而問業。

因以粗識讀書之道爲文之法。先生教人以致用爲主，宴坐侍譚，盱衡古今，於國家離亂之機，中外政教之要，與夫窮變久之宜三致意焉。會外患方亟，國是紛紜。先生所以勤勤詔誨者，欲待通知世故，乘時自效，匪徒以文士相期也」とある。蓮池書院における吳汝綸については、汪效駟「吳汝綸與蓮池書院」〔安慶師範學院學報（社會科學版）第二十三卷第三期、二〇〇四年五月〕、蘇國安・吳洪成「吳汝綸在保定蓮池書院的事業與思想探析」〔河北師範大學學報（哲學社會科學版）〕第三十三卷第一期、二〇一〇年一月）など参照。

(14) 参加メンバーは、注(10) 李尹藩論文参照。

* * *

作者：稻畑耕一郎

Author: INAHATA Koichiro

標題：關於傅增湘的《論北方農事書》——藏園文存之二

Title: Fu Zengxiang 傅增湘's Essay 'Lun bei fang nong shi shu' 「論北方農事書」

摘要：中國在近代社會的轉變過程中，曾經具有重要價值的古典文化，不僅被視作舊時代的殘餘而遭鄙棄，甚至一度成爲公然批判的對象。五四運動前後是古典文化遭受批

判的高峰時期，儘管這些批判並非全然沒有道理。傅增湘在此時代背景之下，以《書潛》爲別號，收集爲數衆多的傳世善本古籍，並通過孜孜不倦的校勘作業，釐清版本源流，留下了龐大的校勘成果，堪稱一位建立後世中國古典學研究基礎的學者。

關於傅增湘在古典文獻方面的研究成就，大半已經由其嫡孫傅熹年整理，並彙編出版，頗令學人受益。但是傅增湘平常偶有創作的《詩歌雜著》之類作品，遑論結爲全集，甚至選集都未獲刊行，這對於深入理解傅增湘的品行業績，可以說欠缺了相當多的資料。筆者對此頗感遺憾，故近年來在讀書之餘，有便即發掘相關資料，撰文予以揭示。筆者在本刊第四十期，曾以《傅增湘稀見序跋二篇探微——藏園文存之一》爲題，介紹傅增湘早年所撰《農學纂要·敍》以及擔任教育部長期間所撰《僑工須知·序》，即爲前述工作的一環。此文發表之後，又有機會讀到傅增湘題名《論北方農事書》的文章，其內容與《農學纂要·敍》密切相關，與《僑工須知·序》也有一定關係，故特此再爲文介紹，以補充前稿之不足。

關鍵詞：傅增湘《論北方農事書》《農學報》蓮池書院 汪

庚年